（城西人文研究第16巻第１号）

『結婚の生理学』におけるバルザックの政治と文学の問題

佐　野　栄　一

『結婚の生理学』は，1829年12月末，≪独身青年　著≫と匿名で Canel 書店と Levavasseur 書店より発売された。『人間喜劇』に修められた作品としては，同年３月末に出版された『最後のふくろう党』に続いて二冊目の，最も古い作品の一つ[1]であり，また『人間喜劇』の最後を飾る『分析的研究』の唯一の完成作品を成している。

『分析的研究』は，1834年10月26日付けの Hanska 夫人宛の手紙を参照すれば，社会と人間的営為の「原理」を解明して『人間喜劇』を締め括ることが全体著作に対して占める構成上の目的であった。バルザックは，この目的を果たすため，『結婚の生理学』の後に四つの作品を加える予定であった[2]。しか

本稿において，『人間喜劇』からの引用は総てプレイヤッド版（Bibliothèque de la Pléiade, Paris, Gallimard, t. Ⅰ-Ⅻ, 1976-81）を用いた。以下，この版からの引用は巻数と頁数のみを記す。

1）『結婚の生理学』の執筆時期は1824年に遡る。テクストには1829年版以前に，通称 Pré-Originale 版と呼ばれる1826年版があるが，ここではこれに加筆修正が施された決定版のみを用いる。

2）『人間喜劇の総序』（*Avant-propos de la Comédie humaine*）の中で，バルザックは『社会生活の病理学』（*Pathologie de la vie sociale*），『教授団の解剖』（*Anatomies des corps enseignants*），『美徳論』（*Monographie de la vertu*）を新たに書く予定であると述べている。[t. Ⅰ, 19]

更に，1845年の『人間喜劇の総目録』（*le Catalogue des ouvrages que contiendra la Comédie humaine*）には『十九世紀の完成についての政治的・哲学的対話』（*Dialogue pholosophique et politique sur les perfections du XIXe siècle*）が予定に加えられている。[t. Ⅰ, CXXV]

し，これ等の作品は，いずれもついに書かれずに終わった。従って，彼が分析して見せようとした「原理」が如何なるものなのか論ずることはできない。ただ，予定されていた作品の表題から，ある程度の推測が許されるだけである。

※

バルザックは，先の Hanska 夫人宛の手紙の中で，『風俗研究』は「あらゆる社会の結果」を「生活の状態，外貌，男女の性格，生き方，職業，社会層」等々の人間のあらゆる様態と年齢を通して，また，人間の「感情とその役割，生とその足取り」を描くことによって表すのに対し，『哲学研究』はこれ等の「結果」が何に依るのか，つまり「何故感情がそうした役割をするのか，生とは何に基づくのか」を表す，と述べている[1]。

一方，『分析的研究』について，彼は，

「原因と結果の後は，その原理が研究されねばなりません。風俗は舞台上の光景であり，原因は舞台裏と仕掛です。原理，それは作者に当たります[2]。」

という，非常に謎の多い言葉を残している。この言葉を如何に解釈すべきであろうか。

バルザックの作品の歴史を俯瞰して見ると，『人間喜劇』の全体構想とは逆に，まず哲学から彼の歩みが始まっていることが分かる。後の『ルイ・ランベール』で著される所謂≪意志論≫と呼ばれる哲学研究は，1817年から1819年にかけて書きためられた四つの哲学的覚え書きの発展であり，決算であると考えられるが，その1818年の覚え書き『魂の不滅について』の中で，彼は，

「総ての可能な実体は同一物質の諸々の変容にすぎない，とわれわれが考える

1) Lettres à Madame Hanska, Delta, Paris, 1965, t. I, pp. 269, 270.
2) ibid.

ことを妨げるものは何もない[1]。」

と述べている。この同一物質は，彼によって，エーテル物質と呼ばれたり，エネルギーと呼ばれたり，力（force）と呼ばれたり，意志（volonté）と呼ばれたり，場合により，作品により，様々に呼び名を変えるが，それ等は皆同じものであり，バルザックの一元論的唯物論の基本をなしている。バルザックは，総てはこの同一物質から派生すると共に，精神現象も物質現象も，同様に，自然を形造っているこの物質の一般法則の下にあると考えていた。物と物，現象と現象の間を，或いまた人間の精神や肉体や魂の間を，この物質は，時には光や音，或は力や意志や観念等々，といった様々のものに形を変えて行き交い，影響を及ぼし合うと考えていた。

この考えは，バルザックの生涯を通して一貫したもので，1842年の『人間喜劇の総序』の中で，次の様に述べられることになる。

「神は，あらゆる有機体を作るのに，唯一でしかも同一の型紙しか用いなかった。動物とは，外面的形相をとった一つの原質であり，もっと正確に言えば，生命発展のために置かれた様々な環境の中で，各々の形態をとったものである[2]。」

また，時代的に二つの引用の中間に位置する『結婚の生理学』では，殊に人間という動物に関して，彼は，

「人間には，与えられた一定量のエネルギーというものがある。われわれの一人一人が所有するエネルギーの，或は意志の量は，音と同じ様な発揮のされ方をする。ある時には弱く，ある時には強い。また，許されたオクターブの範囲

1）Œuvres complètes de Balzac, édition du Club de l'honnête homme, t. XXV, p. 546／cité par 長崎広次『BALZAC の初期の哲学思想(1)』，広島大学教養部紀要 vol. 15, 1968年 p. 275.

2）t. I, p. 8.

で変化する。この力はただ一つのものである。しかも，欲望や情熱や知能労働や肉体労働に変容するが，人が呼ぶところに駆けつける[1]。」

と述べている。

これ等のバルザックの言葉から彼の哲学を要約すれば，万物も人間も同様にただ一つの物質から出来ている。人間の感覚も感情も，精神も肉体も，この物質の変容したものに他ならない。従って，この物質はあらゆるものの根源であると同時に，動作因であり，同一の法則の下にある。ということであろう。それ故，彼はこの理論が，「原因」を，或は人間と万物の運動の秘密を，表しうると考えた。そして，それを表すことは，自分が意図した壮大な著作をより価値あるものたらしめると考えていた。

「あらゆる芸術家が野心を燃やす世の賞賛を得るにふさわしい者たるために，私は，この社会の諸結果の様々な理由，乃至は唯一の理由を研究し，色々な人物や色々な情熱や色々な事件の膨大な集積の中に秘められた意味を捉えなければならなかったのではあるまいか。私は，追求の後，遂にそれを見い出した，とは言わないが，この理由を，この社会的動因を，自然の諸原理に基づいて察省しなければならなかったのではあるまいか（…）[2]。」

『哲学研究』の中枢にあるのはこの考えであり，この理論である。それは，『哲学研究』の全てのドラマの，謂わば通奏低音として，常に流れている。

さて，再び『人間喜劇の総序』において，バルザックは，前頁の所謂「組成の単一性」に関する引用に続く一節で，次の様に述べている。

「私は，この関係について，社会と自然とが類似していることを認めた。社会

1） t. XI, p. 1027.
2） t. I, p. 11.

もまた，人間が行動を展開する環境にしたがって人間を作るのではあるまいか？　動物学において存在する変種と同じだけ，様々に異なる人間が作られるのではあるまいか？（……）人間は，ある法則――と言っても，それはこれから探究しなければならない法則だが，――に従って，自分の品性，思想，生活を，自分の必要にしたがって調えたあらゆるものの中に表現しようとする。（……）大貴族や銀行家や芸術家やブルジョワや僧侶や貧民の，生活習慣や衣服や言葉や住まいは，全く異なっており，しかも文明に応じて変わるのである。（……）悪徳と美徳の総てを記し，情熱の主要事実を集め，性格を描出し，社会の主要な事件を選び出し，いくつかの同質の性格を有する特徴的人物を集めて典型を構成していったならば，おそらく，私は，多くの歴史家によって書き忘れられていた歴史，即ち風俗の歴史を書くことができるであろう[1]」

バルザックの考えによるならば，「一つの型紙」から出来ている人間という動物が，自然に替わる社会という環境によって，自ら様々な社会的「変種」を産み出してゆく。しかも，各々の社会は，これ等の「変種」を各々の社会に特有な文明という大きな単位で特徴付けるばかりではなく，一つの社会は階層を形成し，階層はそれを構成するあらゆる「変種」の運動の動因となる一方，これ等の「変種」は，各々の置かれた階層に応じて共通の特徴を生じさせ，各々の特徴から各々に固有な外的表現を作り出してゆく。

であるとすれば，社会によって産み出されたこれ等の様々な「変種」の主要な典型を，「一つの型紙」の発展の「結果」として描くことは，とりも直さず『風俗研究』の命題であろう。では，『分析的研究』の命題とは何か。それは正に，この≪社会≫を解明することにあるのではないだろうか？　と言うのも，≪社会≫こそは，「一つの型紙」に機能した「原理」であり，「変種」を作り出した「作者に当たる」からである。

※

1）t. I，p. 8～p. 12.

『分析的研究』に与えられた命題が，この様に，≪社会≫を描き，解明することであるなら，バルザックが『分析的研究』の最初に『結婚の生理学』を据えたことには特別の意味があろう。即ち，彼は≪社会≫を表すのに，まず結婚から始めたのである。

先にも述べたとおり，『分析的研究』は最終的には未完の大著に終わり，プランだけしかわれわれの手許には残されていない。プランでは『結婚の生理学』に続けて，『社会生活の病理学』，『教授団の解剖』，『美徳論』，『十九世紀の完成についての政治的・哲学的対話』が書かれる予定であった[1]。

バルザックは，これ等の著作を通して，おそらく，社会が人間の心に生じさせる特有な情熱，しかもしばしば社会にとっても人間にとっても破壊的なものとなる情熱を分析し，情熱に対して善にも悪にも働きうる社会教育を考え，その基盤となる宗教の問題から美徳について論じ，畢竟人間の条件を決定するものとしての政治について考察する予定であったように思われる。彼は，やはり『人間喜劇の総序』の中で，次の様に述べている。

「謂わば，あらゆる善とあらゆる悪とを身に帯びて，生きながらにして鋳型に取られたような，社会，というものが描き出している姿を注意深く読み取るならば，人は，思想，乃至は思想と感情とを含めた情熱が，社会の基本的構成要素であると共に破壊的要素でもある，ということを学び取るにいたる。この点に関して，社会の命は人間の命にそっくりである。人民の命を長命たらしめるためには生命活動を抑制するほかはない。従って，教育，或はむしろ宗教団体による徳育は，人民にとって生活の大原則であり，社会全体の悪の総和を減少させ，善の総和を増大させる唯一の手段である。善と悪の原理である思想は，宗教によってのみ準備され，制御され，導かれることができるのである。（……）カトリック教と君主制とは，双児の二原理である。（……）私は，二つの永遠の真理である宗教と君主制の光の下でしたためている。それは，また現代の諸事象が，今や必要としている二つのものであり，良識を持ったあらゆる作家

1） 冒頭の頁の 注2）を参照されたい。

なら，わが国を再びそちらの方向に向かわしめようと努めるべきものである[1]。」

バルザックの残したプランとこの言葉から，われわれは，彼が，『分析的研究』において，社会の様態を白日の下に明らかにしようとすると共に，この謂わば告発ともなる分析と表裏をなす社会の改革の可能性についても，政治と倫理の問題として提示しようと意図していたのではないか，と推測することができる。

バルザックは，ルソーから多大の影響を受けてきた。しかし，それにもかかわらず，ルソーの様に社会は文明の進展と共にますます悪い方向に向かう，とは考えていなかった。彼が全ての『人間喜劇』の作品の最後に置こうとした『十九世紀の完成についての政治的・哲学的対話』という表題には，理性の漸進的な進歩を前提とする「完成」という言葉が使われている。バルザックもまた，≪理性は自らを否定したとき，より高い次元に至ることができる。即ち，理性は自己否定によって進歩する。≫という十八世紀の百科全書派的な進歩の思想を等しく享受していたと考えられる。少なくとも，彼は，大革命以後の社会の進展によって，一人一人がなにがしかの財産を所有し，それを増大させようと勤勉に働き，それによって生産性が向上し，世の中がより便利となった現状を肯定する[2]。また，自分をも含め，財産のためであれ，学問のためであれ，ブルジョワの知を重んじる態度を肯定する。

ただ，彼は，全体の理性の進歩が遅々としたものであると同時に，人間の理性には一種のヒエラルキーがあると考えていた[3]。一般民衆と一握りの天才との間には，数では割り切ることのできない価値の違いがあると考えていたので

1) t. I, pp. 12, 13.
2) この考えは *L'Epicier*, *De la vie de château* 等，様々の論説や小説の中に見ることができる。
3) 殊に，*La Fille aux yeux d' or* の冒頭にはバルザックのこうした考えが展開されている。

ある。それ故，バルザックは総ての人間が社会において同等の政治的権利を持つことは全く馬鹿げたことだと考えていた[1]。彼は逆に，高度な理念を持つ一人の或は少数の天才による政治を，その危険や非現実性はさておき，理想としており，ルソーの様に，人民の「一般意志」に対する信頼も，直接民主制に対する理想も，持ち合わせていなかった。しかも，彼は，一方で天才によるマキュアベリスムを説きながら，政治にしばしば宗教的倫理の問題，と言うよりもむしろバルザック的美学の問題を持ち込むのである[2]。そこにバルザックのオプティミスムとペシミスムが生まれる。

バルザックは，ルソーの様に人間の「自然状態」こそ最良のものとして文明化した社会を否定することも，社会的動因によって蠢く人間の営為を否定することもなかった。彼は，『総序』に見られる如く，社会は人間にとって第二の自然であると考えていた。だから，人間の美しさも醜悪さもその中にあると考えていたであろう。更に，彼は，社会はより良い政治，より良い指導者によって進歩しうると考えていただろう。しかし，社会の進歩を認めることが，そのまま社会の現状を肯定することではない。

彼は言う，

「人間は善良でも悪辣でもない。人間は本能と才能をもって生まれる。社会は，ルソーが説いたように人間を堕落させるどころか，人間を完成し，向上させるものである。しかしながら，そのとき，利害関係が人間の悪の傾向を恐ろしく拡大させる[3]。」

また，彼は次の様にも言う，

---

1) 『人間喜劇の総序』には，「私は，唯一の社会的手段であるかのように看做されている選挙制度には反対である」(t. I, p. 13.) と述べられている。

2) 例えば，『田舎医者』(*Le Médecin de campagne*) や『村の司祭』(*Le Curé de village*) にこうした傾向を見ることができる。

3) t. I, p. 12.

「私は，こと社会に関して，無限の進歩を信奉する者の仲間入りはできない。私は，人間が人間らしく進歩することを信じる[1]。」

バルザックの中には，美しい人間，美しい社会を求める作家としての美学が存在する。美学は，鋭敏な感性の所産であり，彼はそれを自分の思想の目として総てを見ている。それ故，彼は観察と思弁にたけていても哲学者ではなく，現実を鋭く捉え社会の最も現実的な利益が何かを判断しても政治家にはなり得ない。彼はただ，現実には存在しない存在しうるものを見，自分の思想を，或は自分の美学を表現するために，社会を告発し，人間の喜劇や悲劇を描く。作家にとって美学の表現とは，畢竟，現実には束の間の，乃至は存続し得ないものの存在の貴さを詠い上げることにあるのではないだろうか。少くなくとも，バルザックにとってはそうであった様に思われる。

かくして，バルザックの中には，謂わば車の両輪の様に，オプティミスムとペシミスムが常にある。オプティミスムは，社会を肯定し，進歩を信じ，学芸を重んじ，科学や技術の功用を信じ，生産の向上を肯定し，勤勉の価値を信じ，自由競争を肯定し，能率を重んじ，私有財産を肯定し，能力の不平等を認める，正に，ディドロに代表されるブルジョワ思想に他ならない。しかし，彼は同時に，ブルジョワの原理が決して社会を改善するものではないことも見ているのである。というのも，ブルジョワの原理が社会の隅々にまで行き渡らせる「利害関係が，人間の悪の傾向を恐ろしく拡大させる[2]」からである。

彼の晩年の作品が，悲観的な彩りにより濃く浸される様になったとすれば，それは彼が社会に対する楽観的な見方を全く棄て去ったというよりも，むしろ，彼の美学がより研ぎすまされる一方で，ブルジョワの原理の暗の部分が資本主義の進展と共に，より顕著に醜悪なものとして彼に感じられ始めてきたからではあるまいか。しかし，それでも尚，バルザックには決して社会は棄てきれまい。何故なら，社会は情熱の大掛かりな充塡装置であり，それが如何なるもの

1）t. I，p. 16.
2）30頁の注 3）参照。

であれ，バルザックは情熱の中にこそ人間の真実の美しさを見ているからである。彼は，次の様に述べている。

「情熱は人間のすべてである。情熱がなければ，宗教も，歴史も，小説も，芸術も無用なものであろう[1)]。」

※

『結婚の生理学』は，1829年末という『人間喜劇』の極めて早い時期に出版されながら，既にここで述べてきた要素を総て含んでいる。

バルザックは，即ち，『結婚の生理学』において，結婚を通してブルジョワの社会制度を明らかにし，鋭く告発し，社会の改革の必要性を説き，よりよき社会とそこへ至る途を示しながら，他方でその可能性を暗に否定し，しかもその様に矯正しがたいブルジョワの社会制度の救いのなさをむしろ笑い飛ばしている。つまり，彼は男女の真の結び付きの甘美さと歓びを描き，結婚の幸福とはどの様なものか数える一方で，当時の結婚の歪みを露わにし，そうした歪みを産み出す社会制度の欠陥を鋭く抉り出すが，バルザックはそこで高笑いして，もう一歩も先へ踏み出そうとしないのである。

彼は，結語において，こう言う，

「この書は，結婚に賛成して書かれたのでもなければ，反対して書かれたのでもない。ただ，読者諸氏に結婚の最も正確な描写をして見せれば，それで義務を果たしたわけである。（……）筆者に，この制度そのものに対する敵意があったと思って貰いたくない。筆者が狙い定めているのは男と女なのである[2)]。」

彼は，ともあれ，この悪しきブルジョワの結婚制度を告発しながら黙認する。

1） t. I，p. 16.
2） t. XI，p. 1201.

それは，蓋し，この制度がブルジョワ社会の本質に深く根ざしており，女性と結婚の受難が，ブルジョワ社会の豊かな活力の裏面にほかならないことを彼が知っているからであろう。従って，この結婚制度を根底から否定することはそのままブルジョワを否定することに繋り，肯定することは社会の悪弊を是認することに繋る。それ故，彼は，告発と改革の提案とその不可能性とを巧みに配置して，ひたすら笑うばかりの現状に戻り，この現実をあたかも人間の如何ともし難い悲喜劇的宿命のごとく提示するのである。

その上，彼には，愛に対する深い観念があり，当時のバルザックにとって，凡そ社会改革の意欲以上に，社会に生きる男女の愛の運命とドラマそのものの方が，より重大な関心事であったろう。愛とは，そもそも崇高であると同時に全く排他的で反社会的な情熱であることを，彼は，自らの体験を通して，深く感じ取っていた。従って，深い男女の結び付きを説くことと同時に社会の改善を説くことには，彼にとって，初めから自己撞着があったのである。

※

1819年4月1日，バルザックの父，ベルナール＝フランソワが退職した。在職中の父の俸給は年間7,800フラン，退職後の年金は1,695フランであった。このため，バルザックの一家は，家計の縮小の必要に迫られた。同年夏，一家は，物価の高いパリの Temple 街から，母のいとこの所有する家を借りて住むことになり，パリの北郊に位置する Villeparisis へ移転した。

この Villeparisis には，当時パリ法院評議官（conseiller à la Cour de Paris）をしていたベルニー氏とその夫人及び七人の子供達がいた。両家は，既にバルザック家がパリにいる頃から知り合っていたらしいが，転居を機会に親しい近所付き合いをするようになった。バルザックとベルニー夫人との運命的な出遭いはこの様に準備された。

1822年当時，ベルニー夫人は四十五歳，バルザック二十三歳，夫人には彼より年長の二十八歳の長女がいた。

夫人は最初，不倫であると同時に，見様によってはあまりにもグロテスクなこの恋愛を，分別ある女として拒絶していた。このため，バルザックは，1820年に自らが書いた未完の小説『ステニー』の，Sténie に不倫の恋をする主人公 Job を身をもって演じることになった。彼は，恋愛は自然の情熱であり，自然の情熱には社会契約（制度）の枠などなく，しかも身を焦がし生命さえも脅かすようなこの恋愛は，自然の法の下にある限り社会の法に優先する，といった Job の愛の至上性についての論理[1]を展開して，彼女をかきロ説く。

こうして，1822年3月頃，恋情を打ち明けたバルザックは，同年5月初め，『谷間のゆり』を地でゆくような「無我夢中の接吻」をし，この年の末頃には遂に関係を結ぶことに成功したと推定されている。

しかし，彼が，Job の説く，恋愛は社会契約を超越したものだ，ということを，真に感じるようになったのは，この恋愛によってなのであった。

彼女は，単に彼を激しく愛したのではなかった。愛するときには自己をすべて委ね，愛する者のためには自らを犠牲にし，彼を励まし，献身し，彼のためにしばしば報いられない自らの愛の苦痛に耐えた。更に，彼女は，自分達の関係を神秘的な段階にまで高めて考えていた。

「優しい愛するあなた，私は，私達の絆が，他の人たちの絆が地上で織られているのに対して，天上で織られたと確信しています（……）[2]。」

---

1) 正確には，Job の友人 Vanhers が，彼に説く一連の理論の一部である。Vanhers は，ルソーの如く，自然の法を根拠に社会契約の不当性を述べている。彼に従えば，Job の愛は自然において正しく，社会において罪となる。罪は，自然の法に準じて人間の法に背くことから生ずるわけだが，社会状態が，今，呈しているのは人間の本性に対する犯罪状況であり，社会契約そのものがこの様に不当である以上，彼の姦通は正当なものとなる，と言う。しかし，Job は直ちに彼の思想に従ったのではない。Job は，自分自身を制御し，情熱を制御することこそ，人間の偉大さだと考え，社会に生きる以上，姦通を初めから正当とは看做し得なかった。だが，彼にとって恋愛の情熱を抑圧することは死を惹起することとなる。そこで，結局，姦通を犯罪とする悪しき社会と人間の命とでは，命が優先する，という立場に辿り着き，自己の変愛を至上の位置に置くことになる。

2) Correspondance de Balzac, Garnier, 1964（以下，Corr. と省略），t. I，p. 344.

一方，バルザックの方も，ベルニー夫人を失ったとき，彼女について次の様に述べている。

「私が失った人は，母以上の，恋人以上の，他者として存在しうるいかなる女性以上の人でした。彼女については，神性というものによってしか説明されません。彼女は，私が非常に大変な時期の間，言葉によって，行動によって，献身によって私を支えてくれました。(……)

二年間の間，私達は，病気と，時間がないために，離れ離れでいましたが，お互いに，距離を超えて見えているようでした[1]。」

バルザックは，ベルニー夫人によって，愛の持つ深さを知り，愛の崇高さを知り，またその神秘と幸福を知った。彼が『結婚の生理学』の中で語っている次の様な愛に対する観念は，彼のこの様な経験に由来していると考えられる。

「愛は感覚の詩である。愛は宿命的に，人間の中にある偉大なものの一切であり，人間の思考から発する一切のものである。それは崇高であるか，さもなければ存在しないかだ。存在するならば，必ず永遠に存在し続けるし，常に増大してゆく。古代人が天と地の息子としていたのも，正にこの愛だったのである[2]。」

しかし，バルザックは，この様な愛が，男性よりもむしろ女性に特有であり，かつ女性にとって必須なものであることも知っていた。彼は述べている。

「女たちには，愛に対する本能がある。何故なら，それが彼女たちの全生活だからである[3]。」

愛は，女性にとって，生活の不可分の条件であり，幸福の決定要件である。

---

1) Corr., t. III, p. 131.
2) t. XI, p. 957.
3) t. XI, p. 1084.

たとえ社会がそれを禁じようとも，ひとたび愛の絆が生じ，愛する者がそれを受け入れさえするなら，愛は惜しみなく注がれる。愛は，あくまで愛独自の原理に従うのであって，社会の原理が統御することはできない。それ故，社会が定めた結婚と愛とは本質的な関係を有さないのである。結婚は元来，社会制度として，自然によって結ばれた愛の絆を守る性格を持つべきものである。

彼は，

「結婚というものは，決して自然に源を発するものではない。東洋の家族形態と西洋の家族形態は全く異なっている。人間は自然の意志の代行者であって，社会は自然の上に形成された。法律は風俗習慣のために作られており，風俗習慣は多種多様である[1]。」

というナポレオンの言葉を「著しい感銘を与えた[2]」ものとして記している。

バルザックは，ここに姦通の罪を不条理とする根拠を見い出す。もし，社会制度が女性から，真の愛の絆を結ぶ機会を奪っていたとするならば，社会は彼女を断罪する資格があるだろうか。罰せられるべきは，むしろ社会，或は，その社会の制度を作り上げ，支えている者たちの方ではあるまいか。社会が為し得，また為さねばならないことは，姦通を断罪することではなく，愛の絆を結ぶ機会を女性に返すことである，と彼は考える。『結婚の生理学』の第一部全体に流れている主調音は，この考えである。

※

では，女性から愛の絆を結ぶ機会を奪い，幸福な結婚を奪っているフランスの結婚制度とは，どの様なものなのか，バルザックはこの不幸な結婚制度の由

1) t. XI, p. 903.
2) ibid.

来を歴史を遡って，次の様に分析している[1]。

彼によれば，フランスの結婚制度は，ローマとフランク，そしてキリスト教から来ていると言う。強大な夫権と婦女子の隷属はローマから由来し，女性に対する自由の尊重や，また女性のもつ魂の深い恍惚状態や憂愁の甘美さといった神秘的部分に対する深い敬意は，フランクから由来したと考える。次に，この「女性の隷属性と至上性という二つの原理[2]」が相対立する中にキリスト教が入ってきて，両者の上に道徳と政治の秩序を打ち立てたと言う。キリスト教は，人間の平等の観念や騎士道精神をもたらし，また聖母信仰に見られる様に女性的なものを神の崇高さにまで高めたが，他方でローマの後継者を任ずる法王を戴き，ユスチニアヌス法典を支持することで，ローマ的なものとフランク的なものとの均衡をうまく図った。つまり，法律の上では女性を隷属状態に置き，習俗の上では女性を敬愛した。かくして，「我々の国民性と法制とが現に呈している奇妙な現象が，この時以来形成されたのである[3]」と彼は言う。

しかし，その後の国内の戦乱や対外戦争などの政治的不安定の中で，男の権力が増大すると共に女性に対する敬意は失われ，次の様な状態が現れた，と彼は言う。

「政治的制度に統一が欠けているのに，どうして習俗に統一性が存在し得ようか？　女性は，このため，風土と制度が作り出したはずの姿の代わりに，境遇と男達が作り上げた姿をとった。ローマ人達の父権に従って売り渡され，意志に反して結婚させられて，彼女が家の中に閉じ籠もって暮らすのを望む夫の専制主義に落ち込むと同時に，彼女は自分に許された唯一の仕返しに引き付けられてゆくのを感ずるのだ。そこで，彼女は，男達が国内戦争にひどく忙殺されていた事態の終息と同時に，内乱の最中に貞節であった理由と同じ理由から，退廃的になった[4]。」

1)　t. XI, p. 1000～p. 1008.
2)　t. XI, p. 1003.
3)　t. XI, p. 1003.
4)　t. XI, p. 1004.

このようにして，女性の地位は，法律の上ばかりでなく習俗の上でも低下した。しかも，その後の新しい制度の確立の根本となった大革命とその総決算であるナポレオン法典も，女性が持つべき地位，乃至は回復すべき地位を検討することがなかった。法的にも習俗的にも不当に低く置かれた現在の女性の地位が，この様な歴史的帰結として生じて来た。そうバルザックは説明し，次の様な言葉でフランスの制度と習俗の歪みを結んでいる。

「フランスの混ざり合った習俗は，娼婦という傷と，一層深い傷である我々の結婚というものをもたらした[1]。」

バルザックは，ここで，女性を取り巻く環境の不当性を歴史を遡って分析した。しかし，この歴史に連なる近代において，女性軽視の環境を支えているものが何なのかを，彼は明確にしていない。それは，『結婚の生理学』全体を通じて彼が暴くことだからであり，かつ，彼が密かに充塡した最も危険な爆薬だからである。

※

彼は，当時上流階級で行われていた結婚の仕方について次の様に述べている。

「大部分の男は，まるで株式取引所で国債でも買う様な調子で結婚するのではあるまいか？[2]」

バルザックは，この著作の献辞，及び，初めの4つの≪考察≫で，淑女 les femmmes honnêtes の数を算出する際に，著述の対象が，近代の社会制度を事実上作り上げているブルジョワ[3] の男性であることをはっきり述べている。

1) t. XI, p. 1005.
2) t. XI, p. 970.
3) 「ブルジョワ」という言葉がここで持っている意味については，末尾の［後記］を参照。

彼は，献辞で彼等を「本書を捧げる優れたる男性[1]」と持ち上げつつ，密かに深く含むところがある。それは，たとえ実際の読者が女性であろうと，青年であろうと，この書の薬効も強烈な毒も，みなブルジョワのためにのみ処方されていると言うことである。即ち，バルザックは，現在の結婚制度の根幹には，ブルジョワの制度，或はあらゆる意味でのブルジョワ思想があると見ている。

ブルジョワは十九世紀を支配することになる全く新しい型の権力者である。バルザックが『人間喜劇』の全篇を通じて明らかにしている如く，彼等が大革命であくまで追求した≪自由≫という大原則は，その前に「所有の」という注釈を，≪平等≫という原則には，「法律上だけでの」という注釈を付すべき性格を持っている。彼等の精神は，個人所有と自由競争の周辺で形造られ，ブルジョワ的幸福の最も大きな部位は，積み上げられた財の多寡とそれによって得ることのできる権力によって決定される。結婚もまた，彼等にはその手段に他ならない。つまり，結婚は，ブルジョワにおいて，財産と財産との≪契約≫なのである[2]。

彼等は，妻というよりもむしろ，持参金や，持参金に変わる不動産乃至は無形の財産としての階級や政治権力を妻とる。また結婚によって，二人が統合した財産を継続させるために，子供を求めるのである。即ち，

「結婚は，政治的，民法的，道徳的見地から，一つの法，一つの契約，一つの制度と看做しうる。法とは，種の再生産であり，契約とは，所有権の移転であ

1）t. XI, p. 903.

2）ブルジョワの結婚においては，一般に，結婚式の前に≪結婚契約≫への署名が行われる。署名は，非常に神聖な儀式と同格に扱われており，式服を着用し慣習上総ての種類の髭を剃った公証人が立ち会い，両家の一族，縁戚，友人等と共に，両家と交遊のあるできるだけ高い地位の人物が招待されて行われる。署名の後，結婚契約書が朗読される。結婚によって合併される双方の所有する財産の披露である。この朗読が完了すると，続いて結納品（corbeille）と嫁入り道具の披露がある。披露は，下着の部類にまで及ぶと言う。正に，ここにあるのは財産の誇示である。この慣習は，彼等にとって，結婚と財産との結び付きが如何に強いかを表す証左であろう。（Cf. Alain DECAUX : Histoire des Françaises, Librairie Accadémique Perrin.／邦訳『フランス女性の歴史 1-4』（大修館書店）の第四巻＜目覚める女たち＞参照。

り，制度とは，その義務があらゆる男に利益をもたらす保証である。(……)
大部分の男は，結婚というものを通して，生殖とか所有権とか子供とかいったものしか考慮にいれていない[1]。」

ブルジョワにとって，結婚は最も有利な蓄財の，或は既に十分な財産がある場合には血筋や政治的権力を得るための機会であり，手段であり，謂わば，より有利な「国債」を買ってより確実な年金生活や社会的地位や名誉を得ることと変わりがない。言い方を変えるなら，結婚を含め彼等の行動の規範を成しているのは能率である。

バルザックの歴史に従えば，ローマから継承しナポレオン法典が明文化した「強大な父権と婦女子の隷属」は，ブルジョワの，財産であれ，権力であれ，≪個人所有≫を行うという目的にとって，素晴らしく能率の良い制度であった。総てを一点に集中して目的にあたるが故に，最も無駄のない方法であった。彼等は，倹約の意味も勤勉の意味も，こうして財産が能率良く管理され，蓄えられる制度の上で見い出すことができる。

一方，逆に，恋愛結婚や姦通は，この能率を危うくする。それは，≪秩序≫を混乱に陥れ，娘という，或は妻という，正にバルザックが述べている様に，「財産[2]」を盗まれることに等しいのである。

それ故，ブルジョワの制度は，個人所有の基盤である家庭というものを非常に重要視する一方で，恋愛を抑圧し，この基盤に混乱を持ち込むものを厳しく罰する。しかも，この混乱は，家庭の中の支配される者の造反によってのみ作り出されるが故に，ブルジョワの制度は夫にあらゆる自由を認める一方で，妻だけに非常に厳しい倫理を課すのである。

民法典は，第213条において，「夫は妻を保護し，妻は夫に服従すべし」と謳っている。これにより，妻は法律上永久に未成年として扱われ，結婚は父親

1) t. XI, p. 956.
2) 「妻というものは契約によって獲得した財産だ。それは動産である。」とある。(t. XI, p. 1030)

の後見から夫の後見に移ることに他ならない。その上，妻には夫の許可がなければ，たとえ自分の財産でも処分することができず，妻が未成年と区別されるところは刑事訴追の場合，免責者とはなり得ないということだけである。法律上，女性が男性と同等の権利を有しうる可能性は，成年に達して親権を行使するものが死亡した場合と，結婚して夫権を行使するものが亡くなった場合のみに限られているのである。

また，民法典では，妻が姦通を犯した場合，夫は，自分を裏切った妻を激情に駆られて殺害したとしても罪にならず，また妻を最高二年の禁固刑に服させることができる。一方，夫が妻を裏切った場合，夫は最高 200 F の罰金刑に処せられるが，この罰金は夫婦の共有財産から支払うことが許され，しかも夫が有罪となるためには姦通相手を夫婦の住居内に囲っていなければならない，という著しい不平等が定められている。

更に，父権について，民法典は娘や息子に対する懲戒権，彼等の婚姻に対する許諾権，彼等の財産に対する用益権を与え，遺言を認めることにより一層父権を強化すると共に，併せて財産の集中維持のための長子相続の可能性も残している。一方，これとは逆に，私生児については，嫡出子と同等の権利を認めておらず，相続分は最高三分の一に制限している。

この様に，民法典の家族に関する諸規定を貫くものは，一家の長，即ち男性に全権を集中することによる，個人所有の能率の追求と言うことができるだろう。そして，この能率と愛とは，敵対するのである。

バルザックは，この二つのものの対立によって生ずるブルジョワ夫婦の歪んだ情況を，次の様に述べている。

「他人のために考え，他人を裁き，他人を支配し，他人の金を奪い，他人を養い，治療し，傷付けることを正業としている男，要するにこれ等総ての予定された人々（注：妻を寝盗られる運命にあるブルジョワ男達）は，女を研究するために自分の時間を使うことができるだろうか？　彼等は自分の時間を売って

いるのである。如何にしてその時間を幸福のために用いることができようか？

金が彼等の神なのだ。人は二人の主人に仕えることはできない。それ故，世の中は，青白い顔をし，弱り，病んで，苦しみ喘いで身を引きずる若い女で一杯なのだ[1]。」

バルザックは，女性にとって愛は「彼女たちの全生活」[2]であることを説いていた。しかし，能率的な富の集積と富の継承の目的のために，彼女たちは，まず結婚前に恋愛の機会を奪われ，次に結婚後に結婚相手と恋愛する機会を奪われ，ついには，法の認める売春婦に堕としめられることになる[3]。彼女たちにとって，この生活は，生活であって生活ではない。

勿論，バルザックは『結婚の生理学』において，夫たちに，結婚後に妻と恋愛することを勧め，妻に深く愛されるための様々な注意と方法を教授している[4]。しかし，「人は二人の主人に仕えることはできない」。彼等は彼等の最も愛する金に仕えねばならない。

だが，夫との恋愛の機会を奪うのは，ブルジョワ達の旺盛な社会活動ばかりではない。妻達が受けた教育と，しばしば夫婦の結婚年齢の開きも，この不幸を完成させるのに与(あずか)るのである。

一般に，ブルジョワは，安定した財産か確実に財産を築きうる社会的手段を確立するまで結婚し得ない。それがなければ，持参金付の妻という確実な「国債」を買う資格はできず，民法典の精神も財産のない彼にとっては意味を成さないからである。従って，初めから十分に大きな相続財産のある幸運な例を除いて，彼等は概して晩婚である。

---

1) t. XI, p. 055.
2) p. 35 注3）参照
3) 「彼女はオペラ座の踊り子よりも身を堕とすに至る。というのも，彼女は夫に体を売るからだ。彼女のもっとも甘い接吻にも，金の匂いがある。彼女の言葉の中にも，金の匂いがある。」とある。(t. XI, p. 1104.)
4) 殊に＜考察5 Méditation V～＜考察7 Méditation VII＞を参照。(t. XI, p. 949～988.)

晩婚は，弊害として，不倫の横行と売春の隆盛を招来させる。そればかりではない。ブルジョワたちは，自分の娘を双方の財産にとって有利なこれ等社会的地位の確立したブルジョワたちと妻わせるために，彼女たちを歪んだ純粋状態におく。つまり，娘たちを若い男から隔離し，娘に服従教育を施し，総ての女としての権限は結婚のみから生じると教える。このため，彼女たちは，まず自然な男女の接触を奪われ，好奇心と想像力を肥大させる。次に服従教育によって，総てを夫に依存し，期待する。しかし，それと同時に，彼女たちは，女の権限は結婚の中にのみあると吹き込まれて主婦となることで，結婚により女の自立が得られる，という矛盾した幻想を培うのである。

「結婚における様々の隠された事実に対する底知れない無知は，抜け目ないくせにまだ無邪気なこの娘の目に，結婚に引き続く危険の認識を覆い隠している。彼女にとって，結婚は，あたかも専制と自由，享楽と至上権を行使できる人生の時期の様に絶えず映じているために，彼女の渇望は，満たすべきあらゆる生活的興味で膨れ上がる。つまり，結婚するということは彼女にとって，虚無から生へ呼び出されることなのだ。

もしも，彼女が，自分の心の中に幸福に対する感情を持っているなら，宗教や道徳や法律や母親は，そうした幸福はあなたたち（注：読者たるブルジョワ男性）以外からやってくるはずがないと，千度も彼女に繰り返してきたのだ。

彼女の中では服従というものは，美徳でないとするならば，常にひとつの必然性なのだ。なぜなら，彼女は，あなたから一切のものを期待しているからである。まず最初に，社会が女の奴隷状態を確立する。けれど，彼女は解放されたいという念願も抱きはしない。自分が弱くて，臆病で，無知であることを感じているからだ[1]。」

この様な女性の側の事情が，結婚後の夫との恋愛を著しく困難にさせる。自

1） t. XI, p. 977～978.

立の幻想や過剰な性への期待や幸福に対する夫への依頼心に満たされた精神にとって，結婚の現実は深い幻滅以外の何物でもないからである。しかも，裏切られた心に生ずる敵意は，誤った予見や教育を与えた環境へではなく，夫に向かうことになる。この困難な情況の中で恋愛を成就し，完全な夫婦の和合を実現することは，もし彼が社会的に有能で精力的な男であればあるほど不可能なことであろう。『人間喜劇』の中には，こうした惚れぼれするほど有能な，しかし全く妻に愛されぬブルジョワや貴族が幾人も登場する[1]。しかし，ブルジョワのこの不幸は，当然ブルジョワ自身が刈り取るべきである。あらゆる意味で，不幸の体系を準備し，完成させ，支えているのは，夫たる彼等に他ならないからである。バルザック曰く，

「夫にとって，妻とは，自分がこしらえてしまったものである[2]。」

※

では，この様な絶望的な情況下で，幸福なブルジョワの結婚などあり得るのだろうか。もし在りうるとすれば，その幸福なブルジョワの結婚とはどのようなものであろうか。その例をわれわれは『二人の若妻の手記』ルネ・ド・モーコンブ（Renée de Maucombe）の中に見ることができるかも知れない[3]。

バルザックは，この書簡体の小説の中で，全く相反する二つの結婚，即ち恋愛結婚（Mariage d'amour）と打算結婚（Mariage de raison）を描いている。ルネは，知性にも美貌にも恵まれた女性だったが，持参金がないために修

1) 例えば，『人生の門出』の Serizy 伯爵，『オノリーヌ』の Octave de Beauvais などにその典型が見られる。
2) t. XI, p. 1081.
3) 『二人の若妻の手記』に関しては，中村加津：≪バルザックの『二人の若妻の手記』について≫（関西外国語大学研究論集第44号）から，いくつかの貴重な示唆を得た。

道院を出ると田舎貴族レストラード男爵（L'Estorade）と結婚する。彼は，金持ちではあったが，ナポレオン軍に従軍してロシアで捕虜となり，ようやくフランスへ帰り着いた苦労から，37歳の年齢にもかかわらず50代にも見えた。しかし，彼女はそこにも幸福を築く余地を見い出す。彼女は，自分の家と周りの所有地を整備し，生産力を上げる様々の努力をし，その一方で，風采の上がらぬ夫を励まし，彼に社会的地位を得させ，子供を育て，誰よりも愛するこのわが子に立派な将来を準備する。彼女は，自分の充実した生活の幸福と子供を育てることの喜びとを，もう一つの結婚をしたルイーズ（Louise）に手紙で語る。

バルザックが描いているこの幸福なブルジョワの結婚は，何よりもルネの母性愛と自分の一家を築いてゆくという喜びに支えられている。それは，創造の喜びであり，創造の中心に君臨しているのは彼女である。即ち，ルネは，この結婚で，子供を作ると同時に夫を作り，夫を通して社会と関わり，夫を立てつつも実際には家庭内でも家庭外でも女と同時に男の役割も演じている。

それ故，バルザックが描き得た女性にとって幸福なブルジョワの結婚とは，少なくとも，母となることと夫を通して社会参加すること，と言いうるであろう。しかし，ここで見逃してならないことは，彼女には決してルイーズの結婚の様な愛の天国的状態が訪れ得なかったことである。ルネには男女の愛の陶酔がない。

であるとするならば，ブルジョワ社会を根底から否定しない限り，女性が「偉大なものの一切である」男女の愛を姦通に求めたとしても，それは必然の成り行きであり，責めることはできない。そして，勿論バルザックにはブルジョワ社会を根底から否定しようという気持ちはないのである。

※

バルザックは道学者でも，うわっつらの社会の改善を説く博愛家でもない。

彼は姦通の根が如何に深いか知っており，自らの説く結婚における夫婦の和合法や婚前恋愛の合理性といった主張が，今やブルジョワ思想で堅固に固まった社会制度を前にして，大海に色を投じて染めようとするほど空しい試みであることを知っている。その上，彼もまた，大海の水に馴染んだ魚なのである。

勿論バルザックには，人並み以上に社会制度や結婚制度の改革といったことを含む，政治に対する独自の考察も，政治家となろうとする意欲も，その素質に対する自負もあった。しかし，彼があれほど現実を的確に捉えるにもかかわらず，彼の政治観は殊更空想主義的な，言葉を変えれば審美的な要素に満ちている。それは，或は彼が余りにも現実を的確に捉えるせいなのだろうか。彼はいつも，政治に，あるイデオロギーの実現ではなく，自己の美学が求めるものの実現の可能性を見ようとしているのである。

畢竟，彼は，不倫であろうとあるまいと，恋に命をも捧げようと思う女性を，また，社会の中で自己の野望を実現するために知能と精力を尽くして弱肉強食の戦いを戦うブルジョワを，耐え難いと思うのでも，義憤を覚えるのでもなく，等しく美しいと感ずる心の人間なのである。そこにあるのは，もはや政治の問題ではない。文学の問題である。

バルザックは，困難な状況で，困難であるためにますます激しく燃え上がる人間の情熱を愛する。その対象が何であれ，人間の最も貴い姿がそこにある，と彼が考えるからである。彼にとって，「情熱は人間のすべて」なのである。

バルザックは，『結婚の生理学』の結語の中でこうも言っている。

「われわれの制度は，それが優秀なものとなったからといって，別段有益なところも不都合なところもない。何故なら人類というものは，社会的に言って，善と悪の間に置かれているのではなく，悪と最悪の間に置かれているからだ。ところで，われわれが今や完成した著作の目的が，われわれの習俗と偏見から起こる間違いや不条理を暴露することによって，結婚制度の最悪のものを弱めようとすることであったのだとすれば，確かに，それは，一人の人間が人類の

恩人の列に加えられるために提出し得る最も立派な肩書きの一つには，なり得るだろう。しかし，筆者は，夫達を武装させることによって女たちに一層の自制を与え，結果として，情熱には一層の激しさを，国庫には一層の金を，商業及び農業には一層の活気を与えようと努めたのではなかったか？[1]」

ここでも，バルザックは事を大いに茶化している。彼は姦通が如何に多くの経済効果をもたらすかまで力説しているからである。しかし，哄笑の中で彼は真実をもまた述べている。

社会制度とは元来悪のなである。ただ，そこで最悪なことは，情熱のないことである。情熱のないブルジョワ，情熱のない姦通，それは最悪である。有能な官僚でしかも社会の信頼を一身に集めながら妻に一顧もされない男，金融界に君臨し血も涙もなく絞りとりながら娼婦に翻弄され逆に絞りとられる男，そして，恋を求める溢れんばかりの魅力をたたえる三十女たち，それは実に美しい悲喜劇ではないか。バルザックは，おそらくそう言っているのである。彼にとって，情熱の価値は同等である。

最後に，先に引用した彼の結語の一部を，もう一度繰り返えそう。

「筆者に，この制度そのものに対する敵意があったと思って貰いたくない。筆者が狙い定めたのは，男と女である[2]。」

〔後　　記〕

ここで論じたブルジョワとは単に，有産市民階級だけを指していない。大革命を切り抜けて生き永らえ，ナポレオン民法典の下で新たに行政や司法の分野

1）t. XI, pp. 1200, 1201.
2）10頁，注の2.を参照。

のテクノクラートと成っていった官僚貴族，また資本家となっていった貴族，要するに概して穏健派か自由派の多くの貴族たちも，謂わばブルジョワ化したものとしてこの範疇に入れて考えている。

Gaxotte 流に言えば，ブルジョワとは，限られた社会階層だけを指すのではない。勿論，財産を持たないものをブルジョワの列に加えることは意味がないが，たとえそれが貴族院議員であろうと食品雑貨屋の親父（l'épicier）であろうと，生活態度，物の考え方，行動様態に等しいものがあるなら，彼等は皆ブルジョワである。つまり，ブルジョワとは精神の一形態と考えることもできるだろう[1]。

(Sagamihara, 23 septembre, 1988)

1) この問題，及びバルザックにおけるブルジョワ思想と彼の政治観や美学との関係については，拙論，<『ゴプセック』論：バルザックにおけるブルジョワ的なものの変質>（青山学院大学文学部紀要，第二十七号 1985）においても触れた。